

## 高等教育における聴覚障害学生用オルタナティブ・ビデオ 学習教材導入の試み

植木 克美<sup>1)</sup>・後藤 守<sup>1)</sup>・渡部 信一<sup>2)</sup>

このレポートでは、大学の講義でビデオ学習教材を使用する時に、一緒に受講している聴覚障害学生にそのビデオ学習教材の情報保障をするために著者が作成した「オルタナティブ・ビデオ学習教材」の活用について報告する。オルタナティブ・ビデオ学習教材とは、ビデオの音声を文字化して書き込んだ用紙に、ビデオプリンターでコピーしたその場面の静止画像を貼ったものである。今回作成したオルタナティブ・ビデオ学習教材は4つある。そのうち1つは母子の遊んでいる場面を録画したビデオをもとに、そして、2つは障害の早期診断等と知能検査の実施方法を解説している市販ビデオをもとに作成されている。また、最後の1つは母子コミュニケーションについてレポーターが他の出演者に話を聞きながら場面が進行していくテレビ番組の録画ビデオをもとに作成されている。なお、4つのうち3つは講義内容を深めるために活用され、残りの1つは実習の学習教材として活用されている。

### キーワード

高等教育、聴覚障害、情報保障、オルタナティブ・ビデオ学習教材

### 1. はじめに

現在、本邦の高等教育機関における障害学生の受け入れ状況は、2002年にメディア教育開発センターが実施した実態調査では4年制大学の約6割以上に在籍者がいることが明らかにされている（メディア教育開発センター、2002）。聴覚障害学生については、一般の大学や短大への進学が1960年代後半から認められるようになってきているが、彼らの高等教育への志向は1970年代より高まりをみせ、この当時は国立大学よりも私立大学への進学がほとんどであったとされる（都築、1994；安井、2004）。1990年代に入ると国立大学への進学者も増え、1987年にはわが国で初めて聴覚障害者を対象とした筑波技術短期大学が設立され、聴覚障害者の高等教育における修学機関の選択の幅が広がってきていると言えよう。

このような聴覚障害学生の高等教育への進学にともなう課題とされるのが、講義における情報保障である。これは「講義保障」と呼ばれ、米国と日本の講義保障について比較した都築(1994)や須藤ら(2001)によれば、米国では手話通訳、チューター、ノートテーカー、そして専門のカウンセラーの配置などの支援体制の整備だけ

でなく、学習上生じた課題の解決に際してサポートを受けられる体制が確立されている。石原ら(2003)も、このような米国と比較して、本邦では受け入れ大学や任意団体によって講義保障への支援が進められているものの、制度、方法、意識等の様々な視点から検討すべき課題があるとしている。本邦の各大学での講義保障の取り組みは、報告書やガイドブック等にまとめられ、初めて聴覚障害学生を受け入れる大学は当該学生と連絡をとりながらこの報告書やガイドブックを参照し、場合によっては既に受け入れ経験のある大学の関係者へ直接、コンタクトをとってその受け入れの体制を整えているのが現状であろう。

さて、聴覚障害学生の受講に際しては関連の委員会から講義の実施に際してガイドブックや配慮事項についてまとめたプリントが配布されたりするが、実際に講義を担当する教員はどのようなことを感じているのであろうか。聴覚障害学生を担当したことのある教員に対する調査を実施した筑波大学では、回答者の9割以上が「どのようにしたら良いかわからず、戸惑ったことがある」との回答をよせている。具体的な戸惑いとしては、「要望してこない学生が多く、改善すべき点がわからない」「通訳者がいると、安心して配慮することを忘れてしまう」「配慮しなければと思うが、なかなか大変でできない」「どうすればよいかわからず困ってしまう」等があげられている（筑波大学第二学群人間学類、1998）。

この戸惑いを講義を進める上での教育方法の課題とし

<sup>1)</sup> 北海道教育大学大学院 教育学研究科

<sup>2)</sup> 東北大学大学院 教育情報学研究部

て整理した場合、各大学の報告書の中で担当教員から記述されることが比較的多いのがビデオ学習教材の使用に際しての課題である。ビデオ学習教材の使用にかかわる課題は、講義内容を当該学生に伝達しているノートテーカーからも多く出されている。講演式の講義の場合、講義担当者の話はノートテイクや手話通訳、手書き及びパソコン要約筆記、音声認識ソフトによるパソコン筆記等の方法によって、当該学生へ伝達されるが、このうち最もポピュラーな方法が一緒に同じ大学で学ぶ学生の支援を得られるノートテイクである。ノートテーカーは、「ビデオだと複数の人物の発言が混じったり、早口だったりするので大変だった」「授業者にビデオ内容の要約をあらかじめ作ってもらえるとありがたいのだが」「ビデオをダビングしたり、内容をまとめた資料を準備してくれたので助かった」等の課題とその解決策についての意見が示されている(紀藤ら、2001)。また、当該の学生からも「ビデオは、はっきりいってノートテイクでは対応できません。ノートテイクとビデオの画面を同時に見ることはできないし、通訳の情報は画面とずれるので内容をつかむことも困難です」との声があがっている(筑波大学第二学群人間学類、1998)。このように、高等教育においても重要な教材機器であるビデオによる学習教材の提示は、講義を構成、展開している講義担当者、講義内容を当該学生に伝えるノートテーカー、そして、当の聴覚障害学生という3者にとってその課題性が共通に認識される実態にある。

## 2. ビデオ学習教材使用時の対処方法と課題

### (1) 字幕挿入

これまでの本邦の聴覚障害児への教育実践では、妹尾(1987)によると読話・発語を中心としたコミュニケーションの習得として「口話<sup>注1)</sup>」が採られてきたこともあり、テレビ番組が教材として用いられた。その際には、画面に字幕を挿入する方法が用いられている。

字幕挿入は、現在、字幕放送としてテレビ画面上で目に行うことができるが、日本の字幕放送の歴史についてまとめた都築(1994)によると、字幕のついた映像には(1)文字放送の字幕番組、(2)一般のテレビ番組に字幕のついたもの、(3)字幕付きのビデオ、の3つが考えられるとしている。そして、字幕放送の制度化の取組みは1970年代から開始され、1986年に放送が開始されたことを述べている。

ちょうどこの1980年代半ばから、聴覚障害者のための字幕挿入に関するソフトの開発研究や聾学校の生徒に対する字幕挿入のあり方に関する研究が見られる(小畑ら、1985; 石原ら、1989; 立入、1990)。都築は、この

当時、番組の字幕制作の作業として、番組の台本をもとにビデオカセットを再生しながら文字を起し、その際に番組でしゃべっている内容をそのまま記述するのとはたいへん読みにくいので要約をする必要があったとしている。なお、しゃべっている内容をそのまま文字にするには、15分番組で約8時間かかるとされ、とても労力と時間のかかる作業であったことがわかる。また、立入も聾学校においても「物語」タイプの番組に字幕挿入をする作業の1つとしてセリフを要約することを明示している。そして、字幕挿入にかかわる5つの作業のうち、この要約の作業が一番課題となったとしている。つまり、セリフを要約せずにそのまま挿入すると字幕の入れ替えを頻繁に行わなくてはならず、全部を読むことができなくなってしまうため要約が必要であるというのだ。そして、具体的な課題として、限られた表示文字数の中にセリフを凝集しなければならないこと、あまり要約しすぎると物語の筋がわからなくなってしまうことをあげ、この対処が要約者の主観によって判断されていることを指摘している。また、妹尾も早口のセリフについてその要約をどうするか、ナレーションとセリフの違いについてどうするか、聴覚障害児に見られる読みの速度の限界にどのように対応するか等を字幕挿入に伴う課題として示している。

一方、広瀬(2000)は、放送大学がモデルにしている1970年に設立された英国のオープンユニヴァーシティ(OU)での障害学生に対する支援システムについて報告している。OUは、多様な背景をもつ人々に開かれた大学としての指針をもっており、障害者に対しても積極的に門戸を開放するとともにオルタナティブ学習教材によって学習支援を充実させている。聴覚障害学生に直接かかわるオルタナティブ学習教材の1つとしてテレビ授業番組の字幕化がある。ただし、財政上の問題から全ての番組の字幕化は困難とされている。広瀬は、このようなOUの取組みを引き合いに出しながら、本邦の聴覚障害者の要望として①放送番組等の字幕又は手話によるリアルタイム送信(リアルタイム字幕等)、②字幕ビデオの作成、③字幕放送、手話放送の拡大、の3つをあげている。このことから聴覚障害者自身が字幕という方法を望んでいることが理解できる。

この広瀬の指摘は、聴覚障害学生用の字幕によるオルタナティブ学習教材の作成と利用を本邦の高等教育でも推進していく必要性を強調していると考えられる。しかしながら、前述したように、本邦では各大学や任意団体によって講義保障に対する取組みが進められているが、音声認識ソフトの利用によりこれまでの労力を省くことができてもなお財政面、支援体制での課題が残されており、字幕によるオルタナティブ学習教材による学習支援は放送大学でも進んでいないとされている。

注1) 読話(話し手の唇の動きを見て話しの内容を理解すること)・発声を中心としたコミュニケーションの方法である。

## (2) その他

ビデオ教材の使用に際して、その情報を保障する方法としては、字幕挿入の他に、セリフの文字化、手話通訳、ノートテークがあげられる。このうち、セリフの文字化に際しては文字化した資料は聴覚障害学生に手渡され、学生はそれと照らし合わせて映像を見ることになる。この場合、先の聴覚障害学生の「ノートテークとビデオ画面を同時に見ることはできない」ということばにあるように、文字化された資料を読み続けていると映像と文字化された情報の対応関係が不明になってしまう。したがって、事前に文字化した資料を渡し本人に予習を求めたり、あるいは事後にビデオを貸し出し復習を求めたりする等の本人に努力を要請することや、講義担当者が映像との対応関係に配慮した手立て（例えば、本人のところへ行って文字化資料と映像との対応を伝える）をとるといった講義担当側の配慮が必要になってくる。手話通訳については人材の確保の問題がある。ノートテークについては講義者の話、つまり言語情報をノートテークする場合と異なり、ビデオ教材では映像による視覚情報と聴覚情報を時系列に即して統合していくことが必要であり、言語情報だけのノートテークではその情報保障は困難である。鹿内(2003)は、できるだけリアルタイムの文字情報の提供を試み、B6版の小さな用紙に1~2文をノートテークして学生に渡していく方法をとっているが、渡していく用紙が読まれないまま積み重なっていくことがよくあったと報告している。口話を用いる聴覚障害学生の場合は、ビデオ教材の登場人物の顔が大きく映し出され正面からの画像が主体のものであれば、内容をまとめたレジュメを事前に渡しておくとその理解がある程度、促進されると考えられる。

その他、ビデオ教材の使用にかかわっての対処方法として、タイトルと内容を簡単に板書したり、内容をまとめたレジュメを準備するなどの講義担当側だけで対処可能な手立てもあろう。また、事前事後にビデオを貸し出す方法もあるがこれはすでに述べたように本人に努力を要請する対処方法である。

## 3. オルタナティブ・ビデオ学習教材の作成

著者はこれまで述べてきたことを踏まえ、担当する聴覚障害学生に対してオルタナティブ・ビデオ学習教材の導入を試みた。以下に、その作成と活用の実際について報告する。なお、この報告ではオルタナティブ・ビデオ学習教材の作成にあたって、もとになっているビデオ学習教材を内容によって2つのタイプに分類し、その特徴に合わせた作成方法を考案し紹介していく。

### (1) オルタナティブ・ビデオ学習教材とは？

広瀬(2000)によると、OUでは障害者のためにそれ

ぞれの障害特性に合わせたオルタナティブメディアによる学習教材が用意されている。具体的には、聴覚障害者向けに放送番組の台本の用意、テレビ授業番組の字幕がある。また、視覚障害者向けにはオーディオカセット教材、電子ファイル（印刷教材の電子テキスト化）、触知性教材、点字の学習教材がある。そして、このオルタナティブメディアによる学習教材を総称して「オルタナティブ学習教材」と呼んでいる。

この報告では、一般の大学における一斉授業でビデオ学習教材を使用する時に、一緒に受講している聴覚障害学生にそのビデオ学習教材の情報保障をするために作成した学習教材を「オルタナティブ・ビデオ学習教材 modified audiovisual aids」と呼ぶ。また、オルタナティブ・ビデオ学習教材のもとになっているビデオ学習教材を「オリジナルビデオ」と呼ぶ。

### (2) オルタナティブ・ビデオ学習教材作成の基本方針

ビデオ学習教材は、映像と音声を主体とする伝達メディアである。ここでは、ビデオ学習教材の特質をその情報の受容モードに分けてまず整理してみよう。映像は、視覚的情報として視覚が受容モードとなる。そして、音声は聴覚情報として聴覚が受容モードになる。我々がビデオを視聴する時は、この視聴覚間の情報統合を行っているわけである。

ここでは、聴覚障害学生の実態に合わせて、音声は文字化する。そして、映像は静止画像にする。なお、静止画像への加工にはビデオプリンターを使用する。アニメーションでは、1枚1枚の絵コンテが連続して表示されることによって、視聴者がそれを動画として認知しているわけだが、映像を静止画像に加工することは1枚の絵コンテを作成することに対応する。このように、オルタナティブ・ビデオ学習教材とは、音声を文字化したものを書き込んだ用紙に、映像の静止画像を貼ったものである。

ところで、ビデオ学習教材のコンテンツは、なんらかの具体的な事象（例えば、天気予報や調理手順）を説明することを目的として作成されたものと、ドラマやドキュメンタリー、あるいは個人が収集する日常生活の記録といったその状況と登場人物の間でかわされるコミュニケーションを重視して作成されたものの2つに大別することができよう。前者の具体的な事象の説明を目的とするビデオ学習教材は、映像を説明するナレーションが主体となっている場合が多い。ここでは、前者を説明型ビデオ学習教材と呼び、後者を状況型ビデオ学習教材と呼ぶ。

説明型のオルタナティブ・ビデオ学習教材ではナレーションを全て文章化したものを用紙へ記入し、ナレーションでポイントとなる映像の静止画像をその用紙に貼ることを基本とする。一方、後者の状況型のオルタナティ

表1 相互作用過程分析法の実際 (後藤、1974 を一部改変)

**1 資料の文章化**  
ビデオ録画された資料の登場人物間でとりかわされた全ての発話、および行動、表情 (以下、表出行動とする) について文章化する。さらに文章化した資料を以下に述べる2種類の分析単位によって図式化する。

**2 2つの分析単位の設定**  
文章化した資料を次の2つにより整理する。そのひとつは発話の内容により規定される分析単位で、Communication Unit (以下、CUとする) と呼ぶ。もうひとつはInteraction Unit (以下、IUとする) と呼ばれるもので、文脈により規定される性質をもつ単位である。CU、IUの単位をどの程度まで細分化したらよいかについては、検討すべき余地が残されているが、登場人物間の相互作用過程を重視するためにはCUの確定において意味内容が途切れないように、また、文脈にそって登場人物間のやりとり (誰が伝達者で、誰が受信者か) を図式化できるように分割の水準を確定する。

CUの分割についての判断基準は以下の通りである。

- 伝達者の入れかわりをひとつのCUの目安とする。
- 内容の同じ発話が連続する場合、その長短にかかわらず1つのCUとする。
- 独立したかけ声、あいづち、呼びかけなどはひとつのCUとするが、付随して発話の一部を構成している場合その中に含める。
- 伝達者の入れかわりがなくても異なる発話が後続した場合、別々のCUとして扱う。
- 表出行動も発話と同様にひとつのCUとして扱う。
- 同じ登場人物から発話と表出行動が同時に出た場合、ひとつのCUとして扱う。

CU、IUの切り方の具体例を以下に示す (母親と子どもの遊び場面の分析事例)。

母 親	子 ども	
	「ウアー」 ワニのおもちゃを動かす (CU)	} (IU)
	←	
「アキちゃん、これなあに？」 おもちゃの自動車を手にとって (CU)	「ポッポー」 それを見ながら (CU)	} (IU)
←	←	
「これは違うよ、ウーウーウーの 消防車でしょ」 (CU)	→	} (IU)
←	←	
	←	手を母親のひざにおく (CU)

このように、一方のCUの伝達されている内容を相手が受けた場合、矢印で示し、それが同一のIUの中にあるものとする。相手が一方のCUに対して何も反応を示さなかった場合、ひとつのIUが終わったものとする。また、何らかの発話や表出行動があった場合でも、一方のCUに対して内容的に受けていない時は同一のIUの中のCUとはしない。

ブ・ビデオ学習教材では、聴覚障害学生が登場人物間のコミュニケーションを理解できるように、登場人物の音声と動作や表情なども文章に起こし、登場人物間のやりとりを矢印で結び、これを記入した用紙にポイントとなる映像の静止画像を貼ることを基本にする。なお、状況型のオルタナティブ・ビデオ学習教材の作成にあたっては、臨床発達心理学で子どもと養育者のかかわりのプロセスを分析するために後藤(1974)が開発した相互作用過程分析法<sup>注2)</sup>の考えを使っている。表1に相互作用過程分析法による分析の視点とその手順をまとめてある。この分析方法の考えを利用することには、登場人物の誰から誰へどのようなはたらきかけがあったのか、それに対してはたらきかけられた相手はどのように反応したの

か、といったコミュニケーションのプロセスを文章化できるという利点がある。

(3) オルタナティブ・ビデオ学習教材の作成

今回は、教員養成系大学学部2年に在籍している、口話によってコミュニケーションをとっている聴覚障害学生を対象として作成した。この学習教材は、障害児教育科目である「障害児の心理」(半期・2単位)で活用するために作成されている。講義は試験を除いて12回実施され、このうち4回の講義でビデオ学習教材の使用を計画していた。受講登録者数は75名である。表2は講義のテーマとビデオ学習教材の利用状況についてまとめたものである。

以下に、今回作成したオルタナティブ・ビデオ学習教材の4つを示す。4つのビデオ学習教材は、説明型2つと状況型2つに分類される。なお、実際のオルタナティブ・ビデオ学習教材については、それぞれのタイプにつ

注2) 1970年代に北海道大学教育学部の三宅和夫を中心としたグループが乳幼児の縦断的発達研究を実施し、その研究方法の1つとしてメンバーの1人である後藤守が考案したものである。

表2 2003年度「障害児の心理」の講義テーマとビデオ学習教材

回	講義テーマ * 使用したビデオ学習教材
1	オリエンテーション
2	発達と障害(1)
3	発達と障害(2)
4	発達診断(1) * 知能検査の実施方法を解説している市販ビデオ
5	発達診断(2) * 著者作成ビデオ「母子の遊び」
6	発達診断(3)
7	運動の発達と障害 * 障害の早期診断等を解説している市販ビデオ
8	認知発達と障害
9	言語発達と障害 * NHK番組「名物研究室 母子コミュニケーション」1995年8月19日放映
10	外部講師による特別講義
11	遊びの発達と障害
12	障害のある子どもをもつ保護者に対する支援

いて1つずつを掲載する。

### ①状況型のオルタナティブ・ビデオ学習教材の作成

#### 第4回目講義のオルタナティブ・ビデオ学習教材の作成

はじめてオルタナティブ・ビデオ学習教材を作成したのが、第4回目の講義である。ここでは、知能検査がどのように実施されるかについて説明するためにビデオ学習教材として市販ビデオを活用した。このビデオ学習教材は、知能検査の実施要領の概要を解説した研修用ビデオで、子どもを対象とした検査場面が約30分間に渡って収録されている。この知能検査には10の検査項目があり、1つ1つの検査の実施場面ごとに、「1. ○○」というように字幕のみの画面が最初に提示されてからその後検査者と子どもが登場し検査が始まっている。講義では、最初の2つの検査の場面（4分間）を使用した。

それぞれの検査項目では、最初に検査者が検査のやり方を説明し、次に検査者が質問しそれに子どもが答える。あるいは、検査のやり方を説明し、検査者の「始め」の声に合わせて子どもが求められている課題、例えば「パズル」に取り組むというように登場人物の間のやりとりが把握しやすいという特徴がこのビデオにはある。そこで、オルタナティブ・ビデオ学習教材では、この2人のやりとりを文章化し、矢印で結ぶことにした。この時に、原則として音声は全て文章化し、頷くや指差すといった動作についても文章化することにした。実際のオルタナティブ・ビデオ学習教材は、登場人物のやりとりを文章化したものを用紙に書き入れ、そこにその場面を特徴づける画面をビデオプリンターでコピーして貼ったものである。なお、オリジナルビデオとの対応関係がわかるように、用紙の1番上に「1. ○○」というようにその検査項目名を記入し、その下に字幕画面のコピーを貼っている。

#### 第5回目講義のオルタナティブ・ビデオ学習教材の作成

この講義のオリジナルビデオは母子の遊んでいる場面

を録画したもので、視聴者を意識して制作されたものではなく、記録としてビデオに残しているものである。第5回目の講義では、遊んでいる時の母親の子どもへのはたらきかけについて観察することを目的にして使用されている。このオリジナルビデオの収録時間は10分間である。

オルタナティブ・ビデオ学習教材の作成では、まず、登場人物を確認する。オリジナルビデオでは登場人物は母親と子どもの2名である。次に母親と子どもそれぞれ別々に音声と表情、動作などを文章化する。つまり、このオルタナティブ・ビデオ学習教材では音声は全部、そして映像については登場人物の表情や動作の全てが文章化される。次にこの母親と子どもに分けて文章化したものの双方を、母親の子どもへのはたらきかけがわかるように矢印で結んでいく。そして、母親の子どもへのはたらきかけでポイントになる画面をビデオプリンターでコピーして取り出す。図1が、第5回目のオルタナティブ・ビデオ学習教材の一部である。

### ②説明型のオルタナティブ・ビデオ学習教材の作成

#### 第7回目講義のオルタナティブ・ビデオ学習教材の作成

第7回目の「運動の発達と障害」をテーマとした講義では、健常な乳児の姿勢の発達と姿勢反応の出現についての説明を行うために市販のビデオ学習教材を使用した。このビデオ学習教材は、乳児期の運動発達に関する月齢毎の子どもの状態についての映像とその説明をするナレーションから構成されている。

講義では、ビデオ学習教材から、乳児のある1つの姿勢の発達に関する説明場面と姿勢反応1つに関する説明場面の2場面を選択して使用している。なお、このビデオ学習教材は全部視聴すると約40分間かかるが、このうちこれらの2つの説明場面は合わせて4分間で視聴できる。このビデオ学習教材では、具体的な姿勢と姿勢反応の名称の字幕がまず挿入され、その後、映像とナレーションによって説明が行われ、次の説明場面への転換も



きながら場面が進行していくテレビ番組の録画ビデオである。講義では、番組の終了前の5分間を使用した。このビデオは、乳児の伝達行為の発達を理解するための学習教材として活用されている。

オルタナティブ・ビデオ学習教材の作成では、まず、オリジナルビデオの登場人物の確認をする。登場人物は4名であった。次に、オリジナルビデオの映像を見ながら場面の切り換えを確認する。ここでの場面の切り換えとは、画面に映っている映像がその前のものと変化するということである。このオリジナルビデオでは5分間に10回の場面の切り換えがあった。次に、10の場面毎に音声全てを文章化する。この時にどの登場人物が何を話している

のかがわかるように、それぞれの登場人物の頭文字を付けた上でその話を「」で括って文章化する。そして、10の場面を代表する画面をそれぞれの場面毎に1つ選んで、ビデオプリンターで静止画像にして取り出す。

実際に学生へ渡すオルタナティブ・ビデオ学習教材には、一番最初にオリジナルビデオの概要を文章にしてまとめたものが書かれ、次に登場人物が書かれている。そして、その下に【グラフの画面】というようにその画面の特徴を書き入れて、それに続けて登場人物の話を文章化したものを書き入れる。図2は、作成したオルタナティブ・ビデオ学習教材の一部である。

#### 名物研究室「母子コミュニケーション」 1995年8月19日NHK放映

このテレビ番組は、日本の研究者の研究室をレポーターが訪問し、その研究者の研究を紹介する番組です。

録画されているのは、埼玉大学の志村洋子さんという、初期の母子コミュニケーションをテーマにして研究している、研究者です。録画は、番組の後半部分約5分間です。

#### 登場人物

- あ～赤ちゃん
- 母～お母さん
- レ～レポーター
- し～志村先生

#### 【グラフの画面】

あ：「あー（赤ちゃんの声）」

母：「おー、どったのお」

し：「これ、ちょっとご機嫌が悪くて泣き出しちゃった声ですね」

レ：「はい」

し：「まあ、ちょっとお母さんの声も後ろに聞こえておりましたが、にゃ～って感じで、先ほどのプレジャーサインに比べていただけるとおわかりになると思いますけども、かなり平板な感じの強い声ですね」

レ：「はーあ」

し：「やわらかさとか、穏かさとかはちょっとなくて、一本調子でね」

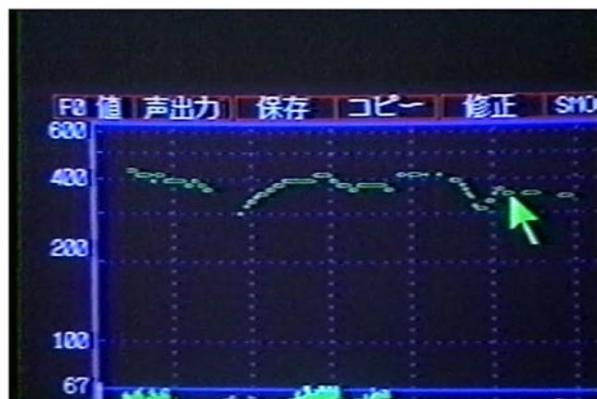


図2 第9回目講義のオルタナティブ・ビデオ学習教材

表3 オルタナティブ・ビデオ学習教材を使用した講義の概要

	第4回目講義	第5回目講義	第7回目講義	第9回目講義
講義テーマ	発達診断(1)：個人に対する発達アセスメント	発達診断(2)：集団と環境についてのアセスメント	運動の発達と障害	言語発達と障害
講義内容	発達検査、知能検査の実施と留意点について理解を深める。	人的環境のアセスメントの実際として、母親の子どもへのかかわりをビデオ学習教材によって観察し、特性評定法 <sup>注3)</sup> による評定を実施する。	乳幼児期の運動発達、言語による行動調整、そして、障害によって運動発達がどのような影響を受けるかについて理解を深める。	ことばの機能、特徴、乳幼児期の言語発達、そして、言語障害について理解を深める。
配布資料： 受講生全員	・講義の内容と進行をまとめたレジュメ ・知能検査、発達検査の説明資料 (B4版7枚)	・講義の内容と進行をまとめたレジュメ ・特性評定法にかかわる説明資料 (B4版5枚) ・母親のはたらきかけの記入用紙 (B4版2枚)	・講義の内容と進行をまとめたレジュメ ・乳児の運動発達の説明資料 (A4版2枚)	・講義の内容と進行をまとめたレジュメ ・特別講義の説明資料 (A4版2枚) ・言語発達と言語障害の説明資料 (B4版2枚)
当該学生	・OHPシートコピー (A4版22枚) ・メッセージシート (A4版1枚)	・OHPシートコピー (A4版16枚) ・メッセージシート (A4版1枚)	・OHPシートコピー (A4版16枚) ・メッセージシート (A4版1枚)	・OHPシートコピー (A4版9枚) ・メッセージシート (A4版1枚)
学習教材： ビデオ	状況型ビデオ学習教材 知能検査の実施方法に関する市販ビデオ	状況型ビデオ学習教材 著者作成による母子の遊びを記録した録画ビデオ	説明型ビデオ学習教材 障害の早期診断等に関する市販ビデオ	説明型ビデオ学習教材 NHK番組「名物研究室 母子コミュニケーション」1995年8月19日放映
その他	絵本「わたしのぼうし」 さのようこ ポプラ社			
使用機器	OHP、スクリーン、ビデオデッキ、テレビモニター			
講義の流れ 【講義開始】	<p>当該学生 全受講生</p> <p>講義者</p> <p>資料配布・確認 説明</p> <p>課題提示 絵本</p> <p>ペアで課題に取り組む</p>	<p>当該学生 全受講生</p> <p>講義者</p> <p>資料配布・確認 説明 発問</p> <p>応答</p> <p>【実習】 説明</p> <p>結果の記入</p>	<p>当該学生 全受講生</p> <p>講義者</p> <p>資料配布・確認 説明</p> <p>課題提示</p> <p>課題に取り組む</p>	<p>当該学生 全受講生</p> <p>講義者</p> <p>資料配布・確認 説明</p> <p>説明 次回予告</p>
【講義終了】	<p>机間巡視 説明 次回予告</p>	<p>机間巡視 説明 次回予告</p>	<p>説明 次回予告</p>	
	オルタナティブ・ビデオ学習教材：		オリジナルビデオ	

注3) 心理学で使用されている人の能力や特性を数量的に捉えようとする方法である。

#### 4. オルタナティブ・ビデオ学習教材の活用

以下に、オルタナティブ・ビデオ学習教材の活用について述べる。

##### (1) 講義の基本的な組み立て

この学生には大学ではノートテークによる支援体制をとっているが、この講義ではOHPによる講義内容の提示と講義の流れを示したレジメの作成等によって、学生が講義の内容を理解できると申し出たので、ノートテークによる支援はなされていない。この学生に対する講義は、次の手順に従って進行している。

- ① 講義の中で使用するOHPシート全てを等倍にコピーしたものを講義開始時に学生に渡す。この時に、メッセージシートを添付し、ビデオ学習教材使用時には講義のどのくらいの時間帯で何分間、どのようなビデオを用いるかを事前に伝えるように留意した。
- ② ①と平行させて、本学生を含めて全学生に全ての資料を講義の冒頭に配布する。
- ③ OHPのシートを用いて講義を開始する。個々のOHPシートの使用の際に、この学生が手元のコピーと対応できているかを確認する。板書する際は、コピーに板書することをあらかじめ記入しておく。
- ④ OHPシートまたは板書によって、次回予告をして、講義を終了する。

以上のようにその回に使用するシートのコピーをこの学生には原則として全て事前に渡していた。なお、全学生を対象として講義への質問に対応するオフィスアワーを設定している。

##### (2) オルタナティブ・ビデオ学習教材の活用

表3はオルタナティブ・ビデオ学習教材を使用した4回分の講義の流れを整理したものである。この表に現したように、まず講義では講義担当者がOHPシートを用いて講義テーマについて説明を行い、次にビデオ学習教材を使用している。そして、オルタナティブ・ビデオ学習教材はいずれもオリジナルビデオと並行して使用されている。なお、第4回目、7回目及び9回目ではオリジナルビデオ及びオルタナティブ・ビデオ学習教材は講義担当者が説明したことを受講生がさらに理解を深めるために使用されている。これに対して、第5回目では講義の中で進められる実習の一部として使用されている。

#### 5. おわりに

このレポートでは、聴覚障害学生にビデオ学習教材の情報保障をするために著者が作成した「オルタナティ

ブ・ビデオ学習教材」の活用について報告してきた。ここでのオルタナティブ・ビデオ学習教材とは、ビデオの音声を文字化して書き込んだ用紙に、ビデオプリンターでコピーしたその場面の静止画像を貼ったものであった。今回活用したオルタナティブ・ビデオ学習教材の教育効果については、当該学生に関する日常的観察や提出してもらったレポートなどによって、その効果が確認された。しかし、今回はひとりの事例であったため定量的な評価は行っていない。今後、事例数を増やすとともに、定量的な評価も行ってゆきたいと考えている。

さらに今後ますます、障害を持った学生が、一般学生とともに大学で学ぶ機会が増えてくことに間違いはない。本報告で示したような工夫を、様々な障害を持つ事例に対し試みることによって、障害を持った大学生に対する総合的な支援体制を構築するよう検討を続けてゆきたい。

#### 引用文献

- 後藤 守 (1974) 相互作用過程分析法の検討. 三宅和夫編、乳幼児発達研究法の探求(2)－評定法による特性把握と相互作用過程分析. 北海道大学教育学部紀要、23、42-59.
- 広瀬洋子 (2000) インフォメーションテクノロジーと高等教育、英国オープンユニヴァーシティにおける障害者の学習支援システム. メディア教育研究、5、1-25.
- 石原保志・塚越浩和・西川 俊・小畑修一 (1989) ろう学校生徒のテレビ視聴のための字幕挿入の研究－文字量・提示時間の番組内容理解に及ぼす影響. 特殊教育学研究、27(2)、25-37.
- 石原保志・及川 力・小林庸浩・細谷美代子・斎藤まゆみ・小林正幸 (2003) 学外講師が担当する授業における聴覚障害学生に対する情報保障方法の検討－手話通訳、パソコン要約筆記、要約解説の比較. 筑波技術短期大学テクレポ、10(2)、9-17.
- 紀藤典夫・福田 薫・小林真二・高橋 修・尾藤弥生・高橋信幸 (2001) 授業保障の実際と課題. 北海道教育大学函館校バリアフリー委員会、函館校における聴覚障害学生の支援体制に関する実践的研究、8-17.
- 妹尾 弘 (1987) NSXパソコンにおけるスーパーインポーズのためのプログラムの開発と字幕付VTRソフト(教材)の活用について. 財団法人松下視聴覚教育研究財団昭和62年度視聴覚教育研究助成レポート、146-147.
- メディア教育開発センター (2002) 高等教育機関における障害をもつ学生に対するメディア・IT活用実態調査. <http://www.nime.ac.jp/~hirose/research1.htm>
- 小畑修一・西川 俊・高橋秀和 (1985) 聴覚障害者のための字幕挿入に関する研究－台詞に忠実な字幕挿入の可能性と効果. 特殊教育学研究、23(2)、1-11.
- 鹿内信善 (2003) 発達心理学の授業で試みたこと. 北海道教育大学岩見沢校サポート委員会編集、岩見沢校における聴覚障害学生の支援体制に関する実践的研究、7-8.
- 須藤正彦・大沼直紀・小林正幸・荒木 勉・橋本公克・松藤みどり (2001) アメリカの聴覚障害者の高等教育機関にお

ける教育組織と教育内容・方法に関する比較研究. 筑波技術短期大学テクレポート、8、205-209.

立入 哉 (1990) 聾学校における字幕挿入のあり方の研究.

財団法人松下視聴覚教育研究財団平成2年度視聴覚教育研究助成レポート、146-147.

筑波大学第二学群人間学類編集発行 (1998) 聴覚障害者のサポートに関するガイドブック.

都築繁幸 (1994) 聴覚障害者と字幕放送サービス. 放送教育開発センター研究紀要、11、155-171.

安井友康 (2004) 高等教育機関における聴覚障害学生の支援の展開と背景. 北海道教育大学岩見沢校サポート委員会編集、岩見沢校における聴覚障害学生のサポート体制に関する実践的研究、1-5.



うえき かつみ  
植木 克美

1988年北海道教育大学教育学部旭川分校卒業。1997年北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程単位修得満期退学。北海道教育大学教育学部岩見沢校教育学講師などを経て、2004年10月より同大学大学院教育学研究科学校臨床心理専攻助教授 (学校臨床心理学)。これまで、特殊学級、養護学校教員の養成、現職教員のリカレント教育に携わる。現在、本専攻で4つのキャンパスを結んだ遠隔授業システムによる講義を担当している。



ごとう まもる  
後藤 守

1973年北海道大学大学院教育学研究科博士課程単位修得満期退学 (教育学修士)。北海道教育大学教育学部札幌校特殊教育学科教授を経て、2002年4月より同大学大学院教育学研究科学校臨床心理専攻教授 (発達臨床心理学)。この間、札幌市就学委員会委員長、同大学へき地教育研究施設長、附属教育実践総合センター長を歴任。1998年から、SCS通信システムや遠隔授業システムを活用して、広域な北海道にある北海道教育大学の4つのキャンパスを結ぶ遠隔授業を継続的に担当している。現在、双方向遠隔授業及び3つのサテライト校への出張講義を中心にした大学院レベルでのスクールカウンセラーの養成に取り組んでいる。



わたべ しんいち  
渡部 信一

1981年東北大学教育学部卒業。1983年東北大学大学院教育学研究科博士課程前期修了。博士 (教育学)。東北大学大学院教育学研究科助教授などを経て、現在、東北大学大学院教育情報学研究部教授。失語症の患者さんや自閉症の子どもたちと長年に渡ってつきあう中で、人間が本来持っているアナログな「知」に魅せられ続けてきた。現在は、あえて最先端のデジタル・テクノロジー、特にロボットに着目することによって、人間のアナログな側面にアプローチしている。主な著書に、『鉄腕アトムと晋平君—ロボット研究の進化と自閉症児の発達—』(ミネルヴァ書房) などがある。  
(<http://www.ei.tohoku.ac.jp/watabe/>)。

## Report on Using Modified Audiovisual Aids for a University Student with Hearing Impairment

Katsumi Ueki<sup>1)</sup> · Mamoru Gotoh<sup>1)</sup> · Shinichi Watabe<sup>2)</sup>

This report explains an attempt to use 'modified audiovisual aids' for a university student with hearing impairment. The term 'modified audiovisual aids' refers to sheets printed with the text of a video narration, together with still pictures from the video. We prepared four 'aids' for this research. The original videos which were the basis of these 'aids' were: a video recording of a child playing with her mother, two videos explaining the early diagnosis of impairments in infancy and the implementation of Intelligence Testing, and, finally, a TV program containing interviews on mother-child communication. These 'aids' were used to deepen understanding of lecture content, and as learning materials for exercises.

### Keywords

Higher education, Hearing impairment, Information assurance, Modified audiovisual aids

<sup>1)</sup> Hokkaido University of Education, Graduate School of Education, Special Course of Clinical Psychology and School Education

<sup>2)</sup> Tohoku University, Graduate School of Educational Informatics